

イギリス在住日本人の 回帰行動と文化消費傾向

社会学部 メディア社会学科 4年

社会学部 社会学科 4年

(2名による共同報告)

研修先国名：イギリス

研修期間：2023年7月23日～8月21日（30日間）

【目次】

はじめに

1. 文化消費傾向について

- 1-1 ブルデューの「ディスタクシオン」概念
- 1-2 「ユニボア」と「オムニボア」
- 1-3 イギリスでの研究
- 1-4 日本での研究

2. アイデンティティについて

- 2-1 アイデンティティとは
- 2-2 現代社会におけるアイデンティティ

3. 現地での調査概要

- 3-1 文化消費傾向における調査仮説

4. アンケート調査・分析結果

- 4-1 イギリス在住の日本人に対する仮説に対して

5. インタビュー結果・分析

- 5-1 調査対象者の背景
- 5-2 インタビューまとめ
 - 5-2-1 日本との交流とアイデンティティ
 - 5-2-2 イギリス社会と日本社会の違い
 - 5-2-3 イギリスの階級と疎外感

6. 結論・考察

はじめに

文化消費傾向について、階級や階層と文化との関係は、これまで世界中で議論されてきた。私たちが普段消費している映画や音楽などの文化は、平等に消費されているのであろうか。研究はフランスやイギリス、アメリカなどさまざまな国でなされているが、階級社会の名残がいまだに残っている欧州や、地域や人種によって生活様式や考え方が分かれているアメリカでの議論が中心となっている。

では、我が国日本はどのようなのであろうか。階級社会が根付いているわけでもないし、人種が明確に分かれている国でもない。では日本は文化的に平等で、文化を規定されずに好きなように、自由に選択することができるのであろうか。

また、海外で暮らす日本人にとって、自身が日本人であるということをもどの程度意識しながら生活しているのかについても調査していく。また、彼らのアイデンティティはどのように形成されていったのだろうか。昨今はアイデンティティを確立することが非常に難しくなっている。特に電子メディアの影響などが強くなっている近年は、国民全体が共通の幻想を抱くことが難しくなっている。その中で形成されるアイデンティティの形も、より国や国民の境を越えたものとなっているのではないだろうか。このような観点から、英国に暮らす日本人を対象にインタビューとアンケート調査を行い、その結果について本稿では論じていく。

1. 文化消費傾向について

1-1 ブルデューの「ディスタクシオン」概念

階層と文化という議論を活発にさせたのは、フランスで同調査を行った社会学者ピエール・ブルデューである。ブルデューは、他者と自己を区別することを「ディスタクシオン」とし、趣味という一見完全に個人の自由な判断に委ねられているかに見える領域においても、その個人の属する階級もしくは集団に選択を規定し方向づけられており、そこには他集団との違いを際立たせようとする卓越化の戦略が介入するとしている (Bourdieu 1979=1989)。

1-2 「ユニボア」と「オムニボア」

ディスタクシオンをめぐる議論は、フランスをはじめとしてさまざまな国で行われている。リチャード・A・ピーターソンは、調査によって威信の高い職に就く人々はクラシックなど高尚な音楽

ジャンルを好むとともに、幅広い音楽を好むという雑食傾向にあるということ、反対に威信の低い職に就く人々は特定の音楽ジャンルだけを好み、排他的に音楽ジャンルを消費する傾向にあるということを明らかにした。また、ピーターソンは、ジャンルを幅広く好む雑食性の人々を文化的オムニボア、特定のジャンルのみ好む層を文化的ユニボアという概念で表した (Peterson 1992)。

また、南田勝也は、多種多様なジャンルを嫌わないこと、すなわちオムニボアが文化的卓越者であることの証であると結論付けている (南田 2007)。

1-3 イギリスでの研究

イギリスでの先行研究では、トニー・ベネットらがイギリスでブルデュエ議論に関する調査を行った。ベネットらによると、イギリス人の専門職=幹部階級、中産階級の特徴として、幅広い文化的関与の傾向をもつこと、そして労働者階級は正統文化への関与の欠如と嫌悪が見られたことを結論としてあげている (Bennett et al 2009=2017)。イギリスでは、階級によって文化消費傾向が違いますが、単にハイカルチャー=幹部階級なのではなく、幹部階級・中産階級はオムニボア傾向であること、労働者階級は正統文化を好まないユニボア傾向であることがわかる。日本ではどうであろうか。

1-4 日本での研究

日本での代表的な研究として、SSM95 年全国調査から分析を行った片岡栄美の研究が挙げられる。片岡は、日本人の大多数の文化消費傾向を特定することに成功している。

オムニボア層は量的にみて最も多く、全体の 54.0%を占めている。日本人の約半数は、ハイカルチャーから大衆文化までの多面的な文化消費をおこなう文化的オムニボアであるといえよう。(片岡 2019:130-2)

日本人は、半数以上が幅広い趣味・ジャンルを好むということが読み取れる。日本でのブルデュエ議論をめぐる調査から、日本でも欧米と似たような傾向にあり、そして欧米よりもオムニボア層が多く、文化的に大衆化した社会であるというような印象を持つだろう。ではイギリスに滞在している日本人はどのような文化消費傾向にあるのだろうか。この問いから、イギリスでの調査をすることになった。

1. アイデンティティについて

2-1 アイデンティティとは

アイデンティティとは非常に定義の難しい言葉である。相良は、『日本・日本語・日本』(新潮選書)の中で、森本がアイデンティティを「自覚」と訳したことに一定の賛同を示しつつ、個々のアイデンティティが対立するものであり、それが争いの原因となるのであれば、アイデンティティは「自覚」という意味以上の、人間の生存に関わる意味を持つと述べ、「自己主張」、「誇り」、「生きがい」、「帰属意識」などと訳すことで紛争や抗争の主たる原因の1つであることが理解できている(岩崎ほか 2007:10-14)。また、岩崎は精神科医であるレイン (Laing, R. D.) が『自己と他者』(みすず書房)の中で、「自己のアイデンティティとは、自分が何者であるかを、自己に語って聞かせる説話 (ストーリー) である」と定義したことを受け、アイデンティティを「自分を規定する取り組み」として、個人に完結するものだけではなく他者からの影響まで含めて広く定義している(岩崎ほか 2007:19)。また、末広はエリクソンが『幼児期と社会 2』(みすず書房)で「自我アイデンティティ」を定義したことをもとに、「自己アイデンティティ」との差異を述べ、異文化接触の際に「自我アイデンティティ」が重視されるとし、「自我アイデンティティ」を「積極的なアイデンティティ」または「能動的なアイデンティティ」と言い換え、「自我の欲求と社会的規範の間に立ち、それぞれを能動的かつ主体的に選び取

り、さらに自己の中にそれらをうまくバランスよく統合できる力を持っている状態」と定義づけた(末弘 2006:64-75)。

本稿では、イギリス社会の中で暮らす日本人に焦点をあてた調査を行う。イギリス社会に生きる日本人がコミュニティに何を求めているのかに加え、日本についての感情の変化について調査を行うこととなり、すなわちそれは他者と自身との区別を明確に意識づけることとなる。そのため、ここではアイデンティティを「他者を顧みて、自分とは何かを積極的に規定していく取り組み」と定義する。

2-2 現代社会におけるアイデンティティ

岩崎が指摘するように、アイデンティティという言葉が文化、性、民族、職業などさまざまな文脈で用いられ、新聞や雑誌などのメディアに用いられることも非常に多くなっており、それは現代社会において自分を規定することが難しい状況が生じているためである。加えて岩崎は現代においてアイデンティティ確立が難しくなっている要因を3つに分けて分析している。一つ目は、ポストモダンの社会構造である。高度成長期の「成長神話」や一億総中流化のような、「進歩」や「理性」といった大きな物語を社会全体で共有することが難しくなり、それに依拠できないために自分自身の在り方を問い続け、個人が小さな物語を紡ぐ必要があるとしている。二つ目は、アイデンティティ確立の引き伸ばしである。成人の仲間入りをする社会学習の期間が長くなり、青年期以降もアイデンティティのゆらぎが生じ、変容していくようになっているとしている。三つ目は、ポストモダン社会に対応したアイデンティティの特徴である。現代社会を生きていくうえでは、匿名性や感情労働などで自己欺瞞などを行うこととなり、本来の自己を語りづらくなってきている。その中で、自分を維持し、自己のストーリーを持つ能力が求められているとしている(岩崎ほか 2007:21-26)。

3. 現地での調査概要

調査期間:2023年7月23日～8月21日

調査場所:イギリス・ロンドン

調査方法:インタビュー、アンケート

調査人数:インタビュー5人、アンケート96人

インタビュー調査は、半構造化でロンドン市内にて5名に対して1人につき約1時間実施した。詳細については4章に記載する。

アンケート調査は、google form を用いて行った。集計に関しては、日本人コミュニティであるThe London Connect 主催のイベントに参加し、参加者に直接依頼する形に加え、街頭での声掛けや在英日本人専門サイトでの呼びかけによるものであり、地域や属性に若干の偏りが生じていることには留意したい。性別に関しては、女性51%、男性48%、その他1%という性別に関して偏りのないデータを収集できた。

調査に際して、性別・年齢・最終学歴・住まい・職業・雇用形態・世帯年収などのフェイス項目のほか、暮らし向き・イギリスへの滞在年数・趣味・好きな音楽ジャンル・音楽行為・平均音楽聴取時間・音楽への平均消費金額・好きな映画ジャンル・階級を意識したか否か、自分が属すと考える階級等を質問項目として使用した。

3-1 文化消費傾向についての調査仮説

イギリス在住の日本人に関して、滞在歴が長いほど、自分が持つ文化資本に応じた文化消費傾向、つまりイギリスのような幅広い文化的関与をする幹部階級とハイカルチャーへの関与が欠如し嫌悪を示す労働者階級のような文化的な差異があるのではないかと仮説を立てた。これを置き換えると、滞在歴が長くかつ学歴や世帯年収が高いほどさまざまな趣味やジャンルを好む文化的オムニボア、反対に滞在歴が長く学歴などが低いほどユニボアやハイカルチャーを避ける傾向にあるのではないかという仮説である。この仮説は日本での調査とイギリスでの調査結果を踏まえたものである。

4. アンケート調査結果

4-1 イギリス在住の日本人に対する仮説に対して

アンケート調査にて収集したデータをエクセルにて加工し、SPSSに落とし込んで統計解析を行った。イギリス在住の日本人に関して、滞在歴が長いほど、自分が持つ文化資本に応じた文化消費傾向にあるという仮説について検証していく。表1に関して、独立変数としてまずイギリスでの滞在歴を1年未満と1年以上に2値化し、世帯年収も3万5千ポンド未満と3万5千ポンド以上に2値化した上で、これらをグループ変数として統合し滞在1年未満年収低・滞在1年以上年収低・滞在1年未満年収高・滞在1年以上年収高の4つの変数を使用した。そして従属変数として、15種類の音楽ジャンルの中から好きな音楽ジャンルをマルチアンサーで回答してもらったものに、該当すれば1、該当しなければ0として合計値を算出し、音楽ユニボアが1、弱ユニボアが2~3、オムニボアが4~5、強オムニボアを6以上とした変数を使用し、これらの2変数をクロス集計した。なお、結果として使用するものはカイ2乗検定より有意水準が0.05%未満のものに限定しており、統計的に有意差が出たもののみを使用している。

表1 滞在年数と世帯年収とユニボア・オムニボア

		好きな音楽ジャンル数					合計
		なし	ユニボア	弱ユニボア	オムニボア	強オムニボア	
滞在年数+世帯年収	滞在1年未満年収低	0%	20%	80%	0%	0%	100%
	滞在1年以上年収低	0%	50%	50%	0%	0%	100%
	滞在1年未満年収高	0%	44%	44%	11%	0%	100%
	滞在1年以上年収高	3%	52%	15%	27%	3%	100%
	合計	1%	44%	41%	14%	1%	100%

N=96 (x2検定: ***P<0.001)

結果として、まずオムニボア傾向にあるのが滞在年数関係なく世帯年収が高い層であるということがわかる。これは日本人が全体的にオムニボア傾向であるという片岡の結論を完全に支持できるとは言えない結果になり、ピーターソンらが実証

した卓越化のための文化的オムニボア説が支持される形となった。

また、同じ世帯年収が高い層でも、滞在歴が長くなるほどオムニボアの割合が増えかつ強オムニボアが出現する結果となった。これはイギリス在住の日本人に対する仮説を支持する結果になったと言えるだろう。そしてこの結果から、イギリスに長くいれば長くいるほどイギリス人と同じような文化消費傾向になっていくことがわかり、ここからは予測であるが海外に滞在する時間が長いほど、卓越化の基準が移り住む国のものに順応していくということが考えられる。しかし、今回の調査は母数の少なさや対象者の偏りなどもあるため、決定づけるまでの考察はできないことに留意したい。

また、省略はしているものの、同調査によって、日本人にも階層的な文化消費傾向が見られ、そしてピーターソンが見出したような、エリートほど多種多様な文化や趣味ジャンルを好み、嫌わないという傾向も日本人に対して検出された。

5. インタビュー結果・分析

インタビュー調査にてあらかじめ定めていた質問項目は以下の通りである。

- ・経歴
- ・海外経験の有無
- ・英国滞在の理由
- ・現在の活動
- ・将来の展望、計画
- ・本来の計画や、渡英前の想像との違い
- ・日本人コミュニティへの所属状況と理由
- ・インターネット上や趣味としての日本文化との交流状況
- ・渡英後に日本への愛着は強くなったか。
- ・生活の中で疎外感を感じることはあるか。
- ・生活の中で階級を意識することはあるか。

5-1 調査対象者の背景

- ①職業：大学教授、英国滞在期間：10年以上
(間に他国への転勤含む)

・日本の大学卒業後、日本で3年ほど勤務し、その後は外資系企業に勤めながらイギリスで語学研修を受講するなど、日本とイギリスを行き来していた。

- ・英国人と婚姻し、現在は英国在住。
- ・生活のベースはイギリスで、日本は年に1、2回ほど訪れる。
- ・中学生の頃に語学留学として1ヶ月ほどイギリスに来た。中学校ではハワイでの研修に参加できる機会もあったがそちらに参加する代わりにイギリスに来ることを選んだ。
- ・高校の頃には、行政が提供するプログラムを利用してオーストラリアに1ヶ月ほど交換留学をしていた。以前と異なるところに行きたいと感じたため、オーストラリアを選んだ。
- ・研修以外にも、日本での普段の生活の中で外国人や駐在員と触れ合う機会があり、カルチャーショックはなかった。英語自体には、映画を見ていたことも含めて強く興味を持っていた。

②職業：求職中、英国滞在期間：2ヶ月

- ・大学卒業後、1年弱アルバイトをした後に渡英。
- ・今回が5回目の渡英で、YMS (Youth Mobility Scheme: 英国における就労を目的としたビザ) を用いている。
- ・以前に2度語学留学でイギリスを訪れており、それぞれスコットランドとロンドンに留学していた。
- ・両親がロンドンに駐在しており、ロンドンとの関係が強かった。
- ・大学1年次に語学留学でスコットランドを訪れた際には、チャレンジするという気持ちと同時に、否定的な気持ちも持っていた。
- ・スコットランドでの語学留学は非常に楽しかった。外国人の友達ができ、自分と異なる文化を経験する中で、当たり前が当たり前ではないことに気づいた。
- ・その経験もあり、在学中に交換留学を決意したが新型コロナウイルス感染症の影響で実現しなかつた。

った。

- ・そのリベンジの意も込めて今回、YMS を用いての渡英を決めた。

③職業：ヘルスケア、英国滞在期間：9ヶ月

- ・高校卒業後5年半ほど日本で勤務した後に渡英。
- ・YMS を用いての渡英。
- ・高校卒業後、国際シェアハウスに住み、そこでの生活が非常に楽しく、新しい価値観をたくさん学ぶことができ、海外で仕事をしたいと考えるようになった。
- ・それ以前は、海外に興味はなく、英語も勉強していなかった。
- ・その後フランスに旅行に行き、そこでヨーロッパにもっと長く滞在したいと思うようになった。
- ・そのためYMSに応募し、抽選に当たったことをきっかけに渡英。
- ・英語圏ならば他の国でも良かったが、一番仕事に集中できるビザがYMSであるため、それを理由にイギリスを選んだ。

④職業：金融、英国滞在期間：1年

- ・高校卒業後、アメリカの大学に進学。2年制大学に行き、その後4年制大学へ編入。大学卒業後2年ほど日本で勤務した後、婚姻相手のイギリスへの転勤を機に渡英。
- ・現在は、イギリスの金融系企業に勤務している。
- ・研究や勉強に向き合いたいと考えており、また新しいことに挑戦したいという気持ちがあったためアメリカの大学に進学した。
- ・それ以前に、カナダに修学旅行で行ったことがあり、その影響もあってチャレンジをしたいと考ええるようになった。
- ・海外に興味があったというよりも新しいことや違う経験をしたいという気持ちが強かった。

⑤職業：学生、英国滞在期間：1年

- ・高校卒業後、アメリカの大学に進学。現在は、

イギリスの大学院に在籍中。

・初めからイギリスの大学院に行きたかったわけではなく、ファッションと経済とマネジメントが融合したものを学べる大学院をアメリカやフランスなどの他国も含めて探した結果、現在の大学院に決めた。

・ただ、イギリスはファッションやアートが有名であり、それに特化した大学も多くありそこに魅力を感じた。

5-2 インタビューまとめ

5-2-1 日本との交流とアイデンティティ

「子供が2人いるんですけど、子供の教育のためにも、日本語をキープしてもらいたいのがあったので、毎年日本に6週間から8週間帰ってましたね。夏の間、帰ってました。彼らには、地元の幼稚園、小学校、中学校まで入れていただいて、体験入学という形で、で、語学というよりも、日本の授業内容、日本でどういう風なことを学んでるか、そういうのを体験してもらいたくて、ずっと入れてます」(大学教授、女性、10年以上)

「日本は便利だし、安いし、暮らしやすいし、まあコミュニケーションも問題ないし。うん、なんなら1番好きな国ではあるかも」(求職中、男性、2ヶ月)

「(日本とイギリス)両方を知ってて、両方の良さをこうピックアップして自分が入れたら1番いいわけじゃないですか。だから結果的に日本はより好きになって、日本に住みたいとも思う」(ヘルスケア、男性、9ヶ月)

「根底として多分海外生活というかがすごく好きとか、海外に住むのが大好きっていうタイプではないので(中略)自分のプライベートだったりとかパーソナルな時間っていうのを考えた時に、やっぱり家族とか友達が多い日本に戻りたいなと自然に思う」「日本人の友達がほとんど、8割ぐらい日本の友達だと思います」「日本に対して、改めてこう、すごい好きになったとか愛着湧いたみたいなのは、アメリカにいた時の方が、初めて海外に行った時の方が(強かった)(中略)単純に日本

に帰りたいなみたいな気持ちはすごくある(中略)ロンドンに来て、初めてそういう気持ちが湧いたっていう感覚はないです」(金融、女性、1年)

「なんか、日本が恋しいみたいなのはあります。メディアとかは、YouTubeはほとんど日本のもの見たりっていうのが多い」(学生、女性、1年)

5-2-2 イギリス社会と日本社会

「この国って、浪人しても、コースを変えても、何歳になっても勉強することはいいことみたいな感じで取られてるんで、その授業のクラスの中には、もう何歳も上の子もいればっていうのは平気です。でも日本だとみんな一律で同じ学年ですよ。だから、そういう意味では勉強しやすい環境ができてののかなとは思いますがね」

「移民の方々もいるし、あと、ほんとに人のことはあまり関係ないですよ。個人主義なんです。ほんとに。いい意味でも悪い意味でも」「イライラする時もあるけれども。だけれども、だからってどうするみたいな感じはない。いい意味でも悪い意味でも。だから、そういう意味で考えると暮らしやすいのかもしれないですね。世間体を考えなくていいっていうのは」「イギリス人はどちらかというと日本人に近いんで、(思ったことをすぐに)言わないこともあると思います」(大学教授、女性、10年以上)

「日本は割と、ルール社会というか、小中高もストレートに行って(中略)それが窮屈って感じてる部分も正直あったかなと」「人と人って意味ではちょっと日本と近いところがあって、あんまりグイグイ距離感近くないし、なんか遠回しな言い方したりとか、すぐすみませんとか言ったりするのは、まー、日本とちょっと似てる。相手を尊重した文化があるなと思っている」(求職中、男性、2ヶ月)

「日本はこう、なんか同調圧力がすごいあって人と違うことをする人がちょっとネガティブ。そのチームからこう外れていく、新しいことをする人に対してネガティブな感情があるな」(ヘルスケア、男性、9ヶ月)

5-2-3 イギリスの階級と疎外感

「階級っていうのは多分根強く残ってると思います。この国には」「バーミンガムより上が北で、バーミンガムより下が南って言われてるんですけど、やっぱり所得の違いもあるし、そういう意味ではバーミンガムより上は結構昔から移民、インド系とか中国系とか、あとは白人が多かったりとかするんですけど、バーミンガムより下は結構いろんところが混ざっているとされていますね。もちろん一概には言えないですけど」(大学教授、女性、10年以上)

「階級は、スーパー(マーケット)が一番顕著に出るとこなんじゃないかな」「意識しなかったら別にすごい気になることではないけど、ちょっと意識してみたら随所に見られるな」(求職中、男性、2ヶ月)

「外国人にとっては多分そんなじゃないんじゃないかって思いますけどね。自分は感じたことはないですね」(ヘルスケア、男性、9ヶ月)

「多分疎外してるわけではないけど、感じる(中略)人間関係がやっぱり深くなっていかないことに、最初すごい疎外感とか焦りを感じたりとかしました。でも単純にそれって文化の違い」「階級は感じますね」「名前にミスターとか、ミスとかミセスとかドクターとかってつけると思うんですけど、その項目がやたら長い。それを見た瞬間に、もう「イギリスっぽいな」と思った(中略)でもだからといって私が外国人の労働者だから差別されるってことはないですね」(金融、女性、1年)

「(疎外感)は全然、あります。アジア人だからっていう疎外感もありますし、あと新しい地なんです、言語っていうよりは、見た目での疎外感っていうのはあつたりしますね。言語も全然あると思うんですけど、(自身が)フレンドリーに行くタイプじゃないんで、日本帰りたいなとか、日本はしょっちゅう帰ったりします」「正直、あんまり考えたことはないですけど、やっぱり自分がファッションやってるんで、カバンとか、着てる服とかで階級はわかるかなっていうのは思いますね」(学生、

女性、1年)

5-3 インタビュー分析

インタビュー調査からも見られたように、日本人は「日本人」であるというアイデンティティを意識し続けており、国境を越えたからといってナショナルトランスなアイデンティティが形成されるわけではないことがわかった。

また、インタビューの中で日本社会に受ける印象として「世間体」、「レール社会」、「同調圧力」などのワードが出た。これらの言葉はインタビューの中で非常に意識的に用いられており、対象者達が日本社会に「窮屈」と感じる要因となっていた。

階級については、インタビュー調査から、日常生活の中でかなり意識される機会が多いことがわかった。アンケートでも49%(47/96)が階級を意識したことがあるという結果となったことから、階級という社会構造があるということはできるだろう。しかし、「外国人にとっては多分そんなじゃないか」、「文化の違い」という言葉が出たことに加え、階級によって不利益を被ったという意見はみられなかった。

6. 結論・考察

イギリスの滞在歴と文化消費の関連について、仮説を裏付ける結果となったわけであるが、都合上結果は一部抜粋に留めているとはいえ、今回は有意差が出た項目が少なく、強く結論付けられる結果とはならなかった。これは、実際に行ったインタビュー調査がヒントになると考えている。イギリスだけでなくアメリカに滞在したことがある方の匿名でのインタビューにて、「違うコミュニティ同士で混ざるみたいなことが、イギリス社会って少ない。多分そういうのって階級の名残りとかがあるのかなって」(金融、女性、1年)とおっしゃっていた。これはイギリスの文化的な問題かもしれないが、アメリカと比べてイギリス人は多くのコミュニティに関わるのがなく、仮に日本人がイギリスに飛び込んでも、例えばビジネスの場

のように必要最低限のコミュニケーションしか取らないことが多い。そういった点でも、イギリスという階級的な社会が残る国に移り住んでも影響を受けることが少ないという可能性は排除できない結果となった。

藤田は「インフォーマントたちが「日本人」という単一の国民・民族・人種アイデンティティを深く内面化している状態を考えると、トランスナショナル・アイデンティティを形成する可能性は低い」としており、冒頭で「国民全体が共通の幻想を抱くことが難しくなっている」と述べたが、グローバル化が進む現代においても他の先進国と異なり日本ではまだ「共通の幻想」が残っていると捉えることができるのかもしれない（藤田 2008:232）。インタビューでも強調されることとなった、周囲と同じであることを暗に強いられる「同調圧力」は「共通の幻想」を日本に残し続けている原因となっているのではないだろうか。

階級に関しても、前章で記載の通り、インタビュー内で「外国人にとっては多分そんなにないんじゃないか」、「文化の違い」という発言が見られた。英国日本人社会は駐在員、YMS、学生がメインとなって構成されており、その場に定住して子へ孫へと次の世代に経済状況を共有していくインド系、中国系、アフリカ系などとは様相が大きく異なる。近年行われている階級に関する調査では、職業よりも経済資本が重要視されているように、経済資本は階級を規定する重要な要因である。それが一定に固定されない日本人は、階級構造の中に組み込まれているということができず、かえって「日本人」であることが強調され、現代においてもナショナルなアイデンティティが形成される結果となっているのではないだろうか。

【参考文献】

Bennett Tony, Mike Savage, Elizabeth Bortolaia Silva, Alan Warde, Modesto Gayo-Cal & David Wright, 2009=2017, 相澤真一・磯直樹・香川めい・知念渉・森田次朗訳『文化・階級・卓越化』青弓社.

Bourdieu, Pierre, 1979=1989, 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオンー社会的判断力批判 1』藤原書店.

Bourdieu, Pierre, 1979=1990, 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオンー社会的判断力批判 2』藤原書店.

エツコオバタライアン・岩崎久美子・相良憲昭, 2007, 『在外日本人のナショナル・アイデンティティ-国際化社会における「個」とは何か-』明石書店.

藤田結子, 2008, 『文化移民-越境する日本の若者とメディア-』新曜社.

片岡栄美, 2019, 『趣味の社会学 文化・階層・ジェンダー』青弓社.

西潤子・沖万美子・南田勝也・志村哲編, 2007, 『音楽文化学のすすめ—いま, ここにある音楽を理解するために』ナカニシヤ出版.

Peterson, Richard A, 1992, “ ‘Understanding audience segmentation’ : From elite and mass to omnivore and univore, ” *Poetics* 21(4):243-258 , (Retrieved September 20, 2023, Google Scholar).

末弘美樹, 2006, 『日本人留学生のアイデンティティ変容』大阪大学出版会.